

10 日本中世における修道士—法相宗・浄土宗・禅宗・日蓮宗を例に

【全4回】／開催方法：現地のみ

みの わけんりょう
蓑輪顕量

東京大学大学院
人文社会系研究科
教授



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000(納入期限：7月30日)

【日程・時間】【全4回】 8月3日(土) 13:20~14:50・15:00~16:30
8月4日(日) 10:30~12:00・13:20~14:50

■受講に必要なもの

[テキスト] レジュメ配布

仏教は体験の宗教であると言われる。それは釈尊が、悩み苦しみから逃れるために、身心の観察を行ったことに起因する。この身心の観察が、初期には念処と呼ばれ、後には止観という名称で呼ばれるようになった。

このような仏教における身心の観察は、日本仏教の中にも伝わった。それは飛鳥時代の道昭から始まり、平安時代の最澄や徳一を通じて、徐々に広まったと見ることができる。

本年の講義は、前年度の平安時代に引き続き、日本の中世の時代、仏教者たちがどのような修行を行い、またどのように修行を捉えていたのかを考察する。まず法相宗では中川実範や南都で活躍する貞慶が注目され、次いで中世初頭では浄土宗の法然が注目される。その後、禅宗が興起し、栄西、円爾弁円、蘭溪道隆を経て、日本の仏教界に達磨禅が定着していくのであるが、その彼らの提唱した修道士を、インド仏教初期の瞑想大系と比較しながら考察する。最後に、日蓮の主張の中にも、同じく仏教修行の実際が垣間見られるので、それも考察の対象とする。

概して、日本の仏教を捉える視座は教理・教学に偏りがちなので、修道士という観点から、実際の僧侶の方達が、どのような修行を、どのようなことを理論的な背景としながら、実践していたのかを考えてみたい。講義の中では、時代順に法相宗、浄土宗、禅宗、日蓮宗の僧侶に焦点を当てて、その実体を明らかにする。

- 第1講 法相宗僧侶における修行
- 第2講 浄土宗僧侶における修行
- 第3講 禅宗僧侶における修行
- 第4講 日蓮宗僧侶における修行

【参考書】

- ①『仏教瞑想論』 著者：蓑輪顕量 出版社：春秋社 出版年：2008
- ②『日本仏教史』 著者：蓑輪顕量 出版社：春秋社 出版年：2015